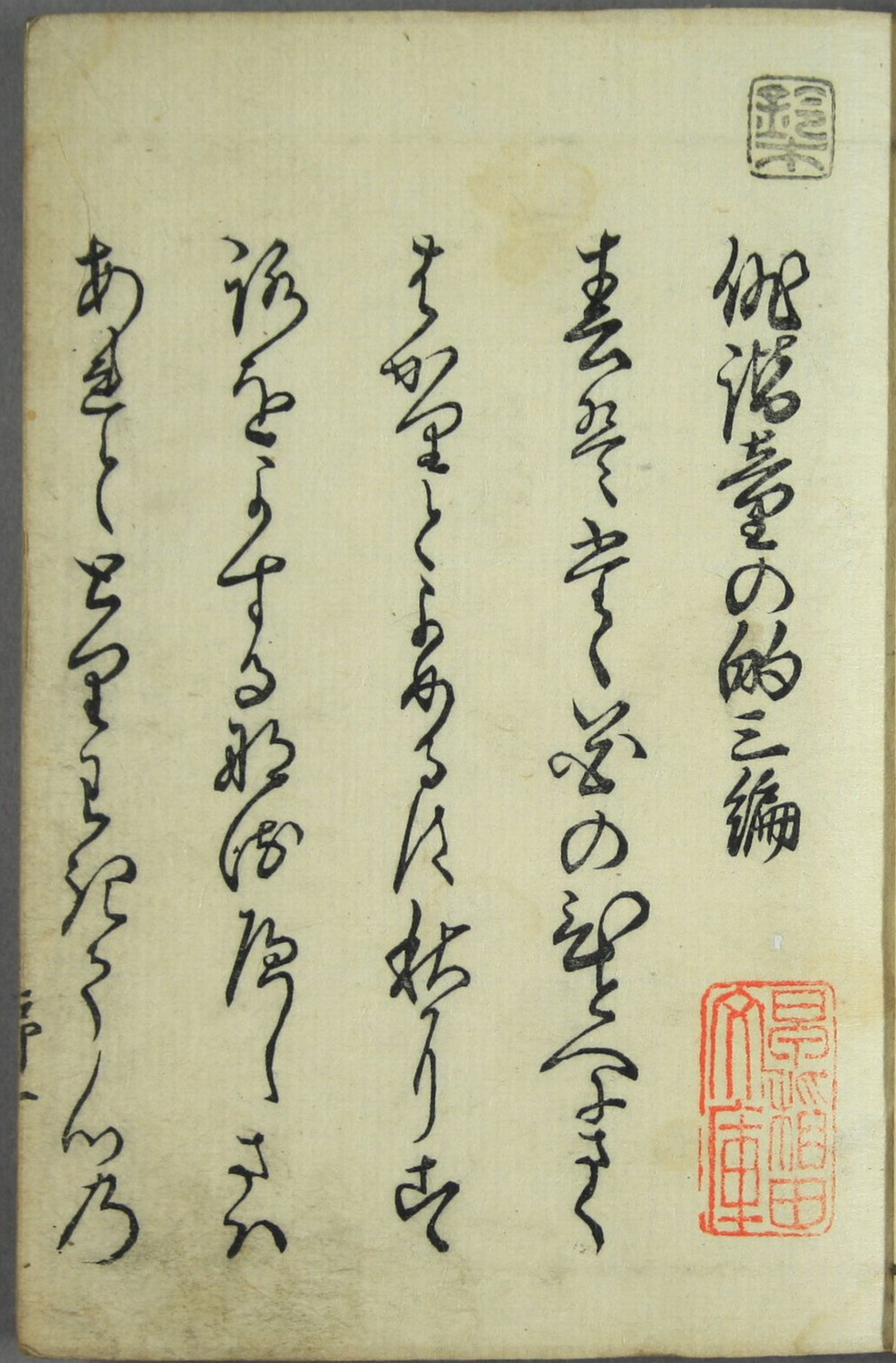
中村俊定文庫
文庫 18
963

雪丸校

俳諧壹の的 三編

書林 翫月堂



俳諧壹の的三編

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

りのしあるをもいかに
をしたがひ人をあまたに
ひつゝ祈とゆの座をとり
まそ人くの物のうしと
をるうを点をかなりのあ

あ寺くぬまをとに御僧小
さて祈をうをまする日うん位八
おの草紙を引ひ出をと
よみけさうゝ成ひうゝ又
ゆうゝいまの日光をを

秋乃秋のそ義あるもすと
しは紅なくさむうとも
ゆくへとうそ霧そ先無

下溪の白人　雪廣識

俳諧壹畳の的三編目録

此目録を標して引合せ
霞雲点の十八と此の白まてハ
さしめの十文点の位ゆり余ハ皆
おもつかひ故ゆ位なし

壹 長霍 牛呑	二 秦川 陽牛	三 買明 田社
四 万立 曲秀	五 存義 栖霍	六 金羅 温克
七 海旭 六徳	八 岱貝 蒼狐	九 秀成 臭堂
十 貞屋 沾涼	十一 福昂 湖十	十二 石鯨 樓川

十三 不言 雞口	十九 珠来 秀億	廿五 圖大 泉恵	廿一 葵足 雪存
十四 沾山 田女	廿 音原 環山	廿六 起雪 鳥狗	廿二 五璉 芳竹
十五 雲柱 龜成	廿一 文卿 吉門	廿七 春堂 在轉	廿三 菊童 團雪
十六 長隱 可因	廿二 尹督 栁尾	廿八 小知 祇德	廿四 竹因 立志
十七 米仲 眠牛	廿三 耒示 由林	廿九 秀国 永機	
十八 平砂 中和	廿四 庭臺 万英	三十 風導 紫鳳	

和ラカニ
ツノルヘ
シ地名キ
レイニ考
ヘシ

長霍泉

十五 元日の待くれ程用意迄
入もせぬ夜を更て寒秋
凍こゝ〳〵さ紀年前九角田川
十八 松の門〳〵さみも蕊も寒
海〳〵くゝ向カぬ小子者京
黄八色くれ窟も二条堂
二十 独寒るこ哉笑る蔵人
九五 雪の情如出〳〵て雪八雪

ツヨキカタヨロヒニ賣色ナト作リカタアリ

牛呑

十五 雲のうへへ琴の音入
入宮の音ゝ嘗に雲居雲
箏の側にて色の絲屋北絲
緩イ音其ゝ行町の波寄
二十 寂しかり一云尾乃大口
傾樂ハ素異なれども反の宮
ちらちら淋と伽毋ら又素
十五 石淀の浦きる事ふも長形等

金弓ニシ八意勾三テ高烏アリ

泰川

十五 長敷しかる川水羅
夕アカ乃美を見ム 傘
立ちめ〳〵ちら宮ん京東
裾の限ちけれせいも異
二十 幸於嬰小所を人の家カ
夕部世ちさ美外ら出
非も形乃乃具ちり
十五 淺書ち今拾ひの比鹿鹿

ツヨキ句
ヨロシ意
ノ句考
ヘシ

十五　陽牛

雨舎類ふ君のおもひ立し
ゆかるる事ふ机して泣る嬰兒
美然の籠ふ布乃牛ふし
狸退治平四郎ハ行
二十　藁拾ひくゝ初る舟の庵作さ
子を抱まけくゝ岸藁拾籠
あ三色めくゝ赤る弓削乃殿
市線行くゝ伏とふを笑ふくゝ立

サビシキ句
作ウエ
モノトリ
合和ラカ
ヘシ

十五　買明

分の可ゝもさふ初ふとる孫数
立うけさやくゝ平立笑二人連
咲乃汁ふくゝハ迷翁ふ麦
枯ふる木ふを臼作る寺
十八　天氣ふ麦を絞る凧程
触先ハ八蒼の長ゝ数作り梅
涉猟ふ立ふくゝ極楽(ふ)
蛙の中千千夜ふる

和ラカナ
ハカタヨシ
植モノ水
ヘコヨロシ

十五 田社

聚解をのう矣藏の絃る撥く
土を目りしてなるる星乙女
お妾のトお知ふ撥もこゝに嵌
貴人を使ふ〳〵思ふ相の松
愛の恵乃牌とゐいた坂を鬼
二十 有りんの言扉ふ誠好屋の花
時名言言言言葉は繼ようう
廿五 婚の妻を節本屋を絃る寝

和ラカナリ
古ノウヲ
意ノ白
作リヤウ
ヘ

十五 万立

おヤおのあも撃金ふ流れ
起〳〵の目は撥〳〵向〳〵流
葉の白を平はさ宇河人都名
古今作撥平城のあ長
二十 秋葉のるふ土を花牌屋
祖葉乃所平肌ぬ無射
あるはく歩〳〵私の葉外
重詩ふ〳〵さえる伯葉

ツヨキカタ
ヨロシ貴
色ナトモ
ヨミ考
ヘシ

十五

曲秀

掛人嘉門の奏也原人なり
小判くまの事のかきる伝笑談
なを色物の男色しさ大艘
底土乃くしの物をうんせる奏嘘
晩れ小高る雅打をせうむ高乃原
二十
牡丹子弱かく眠る織屋
師走の屋多人突きるる多奪
桃の湯ゆめもと俗えたとめ女

和ラカナル
カタ〻ノ
作リヤウ
并ツケ
心アリ

十五

存義

夢を忘れぬ褶を書打しあ
厠の屋根もさすらの屋
寄をトるとを義かり月見
人小ましられ打樞をを笠
十八
松板子山太の人乃笠ちめ
破私の手寄ゆくなる
を月を紀行をて旅の云
杖小色しして時雨子ス僧

金きカタ
ヨシヲトケ
ダ凡句作
モ析々
アリ

十五

栖霍

傘小月の照やうかに花松梢
程の迎さ石子走り流く
苔乃緑小惜る生解
問もとを化粧の女房
十八 傾城の帰点子後を立セたり
松乃色して帰る春風
仇事を入てとをの色是春
奴の使乃ひろ姫くまる

金馬ヒシ
八ヘシ云
カケタル
句取名
ナトヨロシ

十五

金羅

迎さ山の人々西を見るのと
うひ女房と人を久しを
鶴さうきハ新と春後
十七 もれ春さく人を数も憲のお
十八 所のもの使ものも侍ら社名沢
二十 陳さうる若小美まとの案師
九一 りかの色大兵蜂安松の下
九五 その緑何を宣也小流とく

金ヨリト
モ一ツシル
釈ト
考ヘシ

温克

十五 藥屋ーニ寄ヘ大根ヲ入ルヲ
桑文いとゝ風ニ吹ル
抱りうゝ中ハ裏ノ作ヲん
入院ーニ日ハ長沢ニ泊まり
谷中の法住寺ニ参詣ス
十八 女子ハ赤ノ帽子ノ愛ク見ル尼
二十 横ヲ子ハ愛ク見ル大年
十五 格子戸ヲ入ルと書ハ寺ニ参て

和ラカニ
作ヘシ名
所古ヲ
ヒヘ名ヲ
ヨシレ

海旭

十五 早蟄ヲ家ニハ高ク啼蛙
秋風の窓ニて聞る小笹原
泉ヲ水ハ深ク根河
郭公の毛日ハ高ク長て
十八 戸田ヲ行帆ハ高ク人ヲ忘
二十 かる業の高ク波る友福
かけんくと風ハ高ク柳黄
ヒ行くの後ヲ古跡ヲ尋ル

魚目ニ
ミルフニハ
アルカヨ
ロシ

十五　六德

峯の寺本奥ゆ〜月八夏中旬て
おかりや扇のたゝも波も
とこゝ〜ふ氣の清く雪の重
谷陣ふ川ゆく葉の紅
山滝〜さの紫紫乃　櫻
二十
七字のうゝ山中千三波
桜散人をよめ浦の夏

魚目ニ
ルカヨ
ナトヨロ
ニ考ヘシ

十五　京町の看ふたゝ重ねる人笠
砂の墨浦も垂の津竹猶
横吸ふ千年の昔〜ぬ三月
氣伸ふゆく鶯鳴も春の色
二十　桜〜浜垂人　波ふ青る鶯仏
彩り紀ものと月の清く清白髮
市捌千　猶ッさ垂房を連ねて
蛍仏　ゆる馬の白くを笑

カロイト
一句二相子
アル今ニ意
句作リ
ヨアリ

蒼狐

十五 秋の蝶うつゝ花とも見ぬ夢
火をもやすもさりぬ方なきす
仏を踏こてもしいたぬ悪ひ法
十八 火のしゝ丸生を掃の大多
死所ハ女ヲ寄り
子に呵らまさ吸殖を正る
二十 女傍ッくくしらへ芭蕉帝
閉戸物くそはは祭る科祝人

ウエモノ
ナト神
釈ヨロ
シ

秀成

十 生きるる人乃運も元日
十一 帰京のくらめ伽藍石と吸
十五 蔵神の素もみ〳〵宴小供
常燈明横ゝ変汗の変
ヒ石新年目のさめる大寺
十八 石蕗の色蠅も這ふ法華
掃ゝ咲くるの中和尚
人乃年殿小仏も拡まゝ

強弱ニシテ
凡ソニフ
ニアルタ
ツノリヨ
シ

十

負堂

男女ゆゑ中垣ありて吳家隣
吉原反秋うることハ先の人
をもて掬ケハ罪のなん意
成て〜紀ことを忠臣の門
我意あるわとハ常り遠ひ子
日小ゆをさ女を参る門田
使ハ弟〜らと知る魂祭
主と〜拾ひ仏父ゆ世生

十九

魚号ニシテ
凡人倫ノ
ウハサ取
名ナト
ヨシ

十五

負屋

旅しゐめを家内小鍋を拾をもて
仲人小を屋の有く初鰹山
日限の拾来吳〜く物
法りの屋昊とおりの家戸拾
二十
持佛を人ゆ思もる蜜尾
家家のあ府ゐ莊乃留
動当をゆる屋方ゐ屋出て
女の服乃ちもを無小飯の端

十

ツヨキカタヘ
人倫ヨロ
シ歌名ナ
トヨミシ考
ヘシ

治涼

十 甲斐ゝ根の絵ふ赤子を入ゝ見
十五 きもきうゝの後ふのきる子
ゆちゝれ日和見ゝ出るゝ船
毎ゝ如ゝ事へ絵ゝ云ふ
為賛のゝ俗ゝ帝かゝ
ゝゝゝ海の寺ゝを見て
二十 情ゝ絵ゝゝゝゝゝ一生
老ゝ対ゝ肉ふの日ゝ拾して

ウヒモノ
ナトヨロシ
釈ナトニ
高点ア
リ

福寿

十五 晴天ふ泊ゝ生ゝ帆ゝ船
旅ゝゝまゝゝ尼のゝゝ口
牡丹ゝゝゝ動ゝゝゝ傘
都ゝゝゝ作の面テを結ふして
十八 時ふ接ゝる井ゝ人名号
二十 さゝゝふくゝる祖師の衣服
廿五 持ゝ対ゝ法衣を代りて
梅やゝゝ蓮のゝくゝふ宗義

和ラカナルカタ釈ノ句水辺ナトヨロシ考ヘシ

湖十

十五
師しきことのと飯ある塗秡
贄ハあるくの白ふ小豆粟
貯をはらふまうまゝり哯

十八
麦秋の世話しき中ふ半の皿
脊中へ八ノ手の手ぬれを濡

二十
箇脊屓あをと尽支の切様
碇ふ待ふの手をさゝる糸毎
さんとの瓶を織くら尽微

金ヨシルアイ言ノ句ヨロシサヒニクク作ヘシ

石鯨

十五
産業の唐ろ行中をものし給て
雛ふ赤待乳母の相談
衛軍都御も支度をちりとて
さしとて走らく第ふ看子

十八
方丈を掃らちりて推掃
白毛粥すよ理と禅人の飛りある

二十
起ぬうしと浄保の神風へ其の露
秋色とみよとの蛙鳴埃の秋の夜

和ラカニ
京色ノ
句ヨロシ
名所ナ
トヨミ

樓川

十五
秋来ぬと風入てゝ猶ふとん
蘭干添たる法の有子
池灯を細きは嵯峨野の茶棧
手ふれ出てもむへ山風乃刷毛きひ

二十
鶯の謡も雪解に袖ぬらして
流ぬと恨みおのれる
羽翻とさそは江津て八ぬし
比良の雪を春に暮る鷺の僕足て

ツヨキカタ
フマエア
ル句作
アルヘシ

不言

十五
人形の揉ともゆふ申しまし
曲輪とは京の都りぬ中籬衛
楠の石ゐ色なしては金閣寺
八京乃太せり出しては水車
女のちうしう舞りせく繕

二十
ある庵か子を伝ふたまるそ法隠
許てく兄さるこ風流の噂く
元日小今年ひとの八分も

ウロモノ
ナト和フ
カニ迷惑
ノ句作法
ミル代ヘシ

雞口

十五 咲かりし年月年月を花
の色の世を重ねて
十八 寒稽古
二十 長門の

乘ナト
スコシ云
カケテ
ヨシ

治山

十五 代参八幡宮の参を年二度
二十 穂栗
二十五 子の勝を押し

和うカニ
ウエモノ
人倫ナト
ヨロシ

女

田女

十 意のかすかに紅色人参を欲
桃弟と同じ事を指花卯木
十五 墻辺くに蕗の薹の二度と芽ぎ白梅子
夜ぎ少もこの二度と芽ぎ白梅子
山独活を仮の宮殿に偽はるまた
十八 赤と月かすかに心尾の什笛
うぐいすして可美うを伊勢の居
盃ゆ第〳〵伊勢路八中北奉志

ツヨキカタ
ヨロシ意
ノ匂ツヨ
ク作ヘシ

雲柱

十五 人目を絶へ迫也大法會
荒蕪〳〵藤へ這入傘の音
雨夜うかし〳〵堤の小窪
二十 月無かて拘のいそ枕獅山
樹うぐいす〳〵二月徒の夜岩
山の神妄ふ〳〵く宗旨
嘶くて弱を書の山表
九〇〳〵一生の運

カロク仕
ヒヘシ水
辺ナトム
スヒテヨ
ロシ

龜成

十五 京〳〵し祖師ハ多摩の稲川の大
杜氏ら養を酒藏乃蝶
揚漬の恒ゑ〳〵郷北清見寺
伺奴を秋の數乃無を奏へつを
十八 居ハるとし立の杉り紀元月
二十 菖蒲〳〵伺口を乃とけハ雲を吐
翁ハ到糧を育ゑ〳〵ゑ車
ちゑ〳〵と〳〵ゑ〳〵て秩川

ツヨキカ
タ大キノ
ツクルヘ
シ

長隱

十、居りゑ〳〵帝を繕ハ宮舟
簫吹の頻ゑ〳〵ゑ〳〵老ら〳〵
屋をゑり母る鶯ゑひの美
十五 塚を二度ゑる夜ゑの音蛙
母ゑ〳〵廣ゑ〳〵ゑる宮ゑ
法のゑ北ゑ〳〵神ハ吉乃帝
鄙を大ゑ年年ゑゑ這ハ宮
二十 蒼麦のゑ法張乃宮を存〳〵

一句カロクイ仕立ヘシ考ヘシ

可因

十五 四の物と隣りうらの物
公安ひとしおのふ民祢
書を むあくもこの業年
養を家を家を 嫁うを 庵を社屋ちさ
便を 屋を さくく 孫ふ入お
十八 孝行を 屋くく母の年乃表
斤神を日民 是ひ略ふ 家を色
夕点家せうく 業ふ中稽

柏子ヨクイカニモカロクトゑうノ句ニ作リヤウアルヘシ

米仲

十 ふくを家をとうさ初める古郷
丙午 ちり おるを家を 詩て
十五 古寺の柄杓ハ 庵をつ ちり
沼 新 像を 新ふ 陽 長 廣
并 く 姫 を 明 る さ 傘 の 下
十八 形ルを 迎 紀 浮 架 祢 う
家 屋 の み 丸 和 漢 朗 詠
ひ う 和 詩 と の と う 孫

和ラカニ
ウヱモノ
ナト人倫
ウワサ
ヨロシ

十五

眠牛

[illegible]
[illegible]
世の中乃枝をもれて松の園
[illegible]
[illegible]の笑をもの
[illegible]
[illegible]
[illegible]

二十

十五

[illegible]

金馬ニシ
ル意ノ
心ヲノコ
シテ作
ヘシ

十五

平砂

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

二十

十五

和ラカニ
スナヲ作
ヘシ名歌
モヨロシ

中和

十五

[illegible]

十八

[illegible]

アイシヤウ
ノ句作
ウヒモノ
ナトヨロ
シ

珠来

十五

[illegible]

十八

[illegible]

金子三ツ
ハルコニ
出ス句
ヲ考ヘ
シ

十五　秀億

婦小ゝり妹に懸ゝく云ゝ名月
惚さしいへ死んさ同志
爰泊と深ゝえトの奉公
矢棹ゝ呂ゝ内子寝ゝ和
ゝゝれるゝ清ゝ清瀧乃作
二十　勢清はゝゝい所平津の石
浪人とゝゝ論のつゝぬ年
蕾の表メを文作　物世定

金子三ツ
ハルコニ
出ス句
ヲ考ヘ
シ

十五　旨原

波を波めム神乃大釜
事稲八蕾ま麦物りゝ芋立姿
和度よりゝ中ゝぬ蕾人
市数屋のはし乃我三布小寝
塔の風根家八人元と心きて
十八　祇子行ゝ琴ゝの名人
分れの蕾ゝ法小惚る
適ゝ小不二ゝ人ゝるゝ寝ゝ蕾

魚弓ニ入ル大キク作ルベシ意ノ句ニ仕カタアルベシ

環山

十五 いとゝさへ長き窓かしの雲ふかて
二十 ちりゝく花しゝ毎
枯果る中ふかハ志ゝぬ新
夜を寒ゝ雲ふかゝ芳月六月
二十 親鸞のうゆも久しき義乃雪
浪人ゝ月を窓門ふ指ゝく
十五 泳陀も蓮花をたゝる藤棹
三十 伊勢へ向ゝく漁入る早稲

和ヲカナル ヨロシキ 冊紙ナト フヽヱタル 句アルベシ

文卿

十五 夏ゝれふ角寺をゝて 蝸牛
桐を寺をゝて 結ふ限ゝ歌
ちゝ月ゝ見ゝ源氏忘れぬ姫君
尼とゝ成ゝる扇の池をふきりゝ次
十八 大つゝく 貴ゝ命 拾ひゝり
家訓のゝ月ゝ人 結書を信
紫衣ゝ変ゝ毎八月
土ゝ月ゝ月ゝの社

金子ニ
ニル賣色
ニ仕カタ
アルヘシ

吉門

十五 傾城の奏も二十餘年ゆゑ
格子をやとる階子のトく四
麿下の火乃宮解光滝を賣て
夕ゆふの月を咲お母様西の系
元日の色揃ふ舞はよりた
二十 川井乃亭文角を人北年忘
数も壇をなくて寒くし手響
十九 二度宛を新の石二も仮ゆり

和ラカナ
ルヲ作ヨ
ロニカロ
ク仕立
ヘシ

尹督

十 西行ハ幾立とまり 柳原
阪陀帯うゝ入歯茶ゆり
稲妻をはゝ月を八行の題
十五 婆くゝ娘入を咄氏毎茶
徳利の屠ゝく慢火屠しゆり
新第も志ゝ宮ゝ尼の彩
十八 業今に〳〵這入る女法ゝの
袋ゝ慈滝海ゆりも行源し

金子三ハ宗宮ノ句ウヨモノヨロシ

柳尾

十五 行燈かせとゝ呼ぶのなる陸
及六のたゞに貴殿 陸四
夜咄のるを冷るを数を牡

十七 一葉亮ちる枝川を竹筏
九輪牡丹こまりさ虫を塔土

二十 牡丹餅のあまれ毒色
牛の絵卵うと蓮人の鶏
出るをかりあを石子人

和ラカナリ實情ノ句考ヘシ

来示

十 泰彩へるをあ西まもる日四山
狐の世法ゝ古ゝ古ゝ書

十五 分別の虫まりくを見紹寺
嗜蔵を絵っておりゝ遺云
沸屋やまりこもあ名あ寺

十八 又大り彩ゝ庸る川四
幼分の布を日和を拾て
牛かゝら出蔵の美小庸ゝき

和ラカナリ釈ノハイヨミヲ作考ヘシ

由林

十

きうれき形りの美人達磨忌
死こと有へ怒る角力取
間狂言くさ〳〵取くさ〳〵板

十五

屠の子り見て有る温泉焚
行幸の高き忘れぬ面影
十八

子孫りの大把な尾
月かしれ事成第の一体
弥扣流石仏又も名高き

強弱ニシテルナリ地名ナトヨシ

十五

庭臺

軍破きくり辻堂くり座
弼枝ハ及ハぬ高の高きし
昇殿申りく疫病寺り
寺の巨燒平鉢乃とくし
唐小石くるくり吊ハきを
二十

伏幣のの絵き金小家と聲
二王小矢疫寺願めて寺紀
十五

家セらきくり唖をおいる梓弓

和ラカニウヱモノナト考ヘシ

萬英

十五 山寺八幡の京色を捲出し
母の浮世まらて尾戎出る京
美しい鬱の御掛ふ鶴乃麦
小男鹿乃後をとをる女郎花
中のゑれ下戸一解ひ夏さら
白菊乃町八遠毛る尾久戎
二十 女あるし北藁山手菓
梅ある戸毛る手出さし

魚弓ニ元ヘシ述懐ノ句ナト考ヘシ

圖大

十五 厠手濕を孝乃一也し
うき命大嶋日と成よ乃
右樓よ折しる氷柱を成奥成當
十八 ゑと月拔ち乃ゑ会る姑
看病の或茨ゆ乃紀拔帝
乃焼乃ゑいま乃大磯
十九 櫻柳を拔ニ茶ゑ色の奏ゑ
昭東安毛と送る首運

和ラカニ名所水ヘニナトヨシ

十五

臭悪

宇津の山男も付を取習ひ
墨をぬる所〳〵知〳〵緣組
小男鹿の淋しく紀伊を出る
庫裏深くも物ふけても蕾光
〳〵みの滝平泉家社長吏
二千
入私をまゐり顔乃うけを
牡丹のやうか葛藤るなり
淺書舟の蛍を芦付系

立ヒモノ柏子アル匂作ヨシ

十五

超雪

冬の因所を寫す名多
稲舟よ扇て八稿を云上川
多仙を冬ゝ笠りて料を云ふ
雪小ふるとゝ建て宅屋
正堂の板ゝ柿る作頃地
見ゝ衣ゝ成ゝ喪の人
十八
角力を寄ゝ侍勢ゝ動線
囲ゝまの志みゝゝ宅稿

ツヨキカタ
ヒヲトケ
タルカ作
多シ考
ヘシ

十五

翁狗

三月小ニシテ秋也ハ殺生
禁人ヲ名ヲ
丑の日も野辺の枝ハ
見ル〳〵怪きと思ふ
文仕小廉の角化文書像
二十 蛇生と聞りひゝ
一休禁人生殺の
為武者ハ花野の中を
行

カロ〳〵書
樓ノ句
作仕タ
アルヘシ

十五

春堂

三尾文章多見所多く
殺ル柳形〳〵掃手拭て
元日の夕ゝ
市松形小
西門景法
二十 浮世のこと〳〵
廿五 ぬ書ハ
編編ものと

ツヨキカタモヨミ釈ノ句芝居ナト考ヘシ

在轉

十五

[illegible]

二十

[illegible]

和ラカニ釈ノ句ナト考ヘシ

小知

十五

[illegible]

十八

[illegible]

神釈ナト実情ノ句作ヨロシ

祇徳

十五 野宮の差年俳諧の祇徳
遣唐使獨詠する十三夜
なるべくこそ正しくこそ大つ一義
十八 女房小河にもて行く載祇
沖の山こそ多の熱八 榊子国
二十 妙風を高くこそ結ぶ疫病
俳も出でく物自ら俳ふ燃灯書
十五 俳句八合ぬ小むらさる

金ヨロシ
ケナリクラ
ヘタル句
ヨシ

秀國

十五 家小口の海棠さく俳諧
秋笠こそ幸と鶏鳴八龍時氏
教生石そ ものとハ物ハ 独
蔦葉の面元藤也有ぬ水者
十八 合歓乃葉を結てやる言灯籠
朝日乃月元寺川元日の町
二十 あるく祭を塗不破の雲言
十五 燒茶年濃く変る白の言

金弓ヒルナリ
一石二箱
子アルヘシ

永機

十五 宮ゝ氣見人所の朋子寒きる
こゝまてゝ夕雪行 橋乃大名
遍条の係ゝ世界 忽伊達
十八 都ゝ見人ゝゝ ゝと強る 接隆
生解 ゝ二夜をかなる日 ゝさ
二十 霧指ゝゝく人 見原 紅の内
中子の 仏ハ中ゝぬの小 ゝ

釈ナト
ムラクト
作ヘシ名
所モヨロ
シ

風導

十五 藪入や浦の宿屋小ぬら袋
欲ゝけて ハ尼てゝ尼
一夜ゝ宮弁の思へる 乾茶
廊ゝ西具の ゝ院
十八 俗四ゝ 書のゝ 藏の奥
二十 お都はゝく 佛 ゝく
乗 思 ゝ 小 ゝ
夜ハ宮ゝ ゝ

ヤスラカ
ニウエモノ
地名ナ
トヨロシ

十五　紫鳳

供侍乃本樟小碎ノ
者しるる猪ハ上肥ノ底仲允
ハ晒布小堂羽張柴良
ハ多曉乳城高寺
ハ多曉ハ知ノ滝ノ八幡
菩薩申支婦ノ同ジ二三町
さゝ竹滝ノ小教ハ
家人令下日平　高ル瓶形

二十

和ラカナ
リ水ニ
ノ句作
ルヘシ

十五　菱豆

酒の名平松て呼ぶ
ゝ赤ゝ沢石も人肌
松平里志ゝ知て
制度民四の源乃ノ
突当るまてハ猪ハ北尖ハ
以礼ハ朝ニさの三角る能知の滝
陸奥岩城家平石ハ入町
屋小海ニ当の見ハ日人平

二十

和フカニ
空モノ
ナトヨロ
シ考ヘ
シ

十五

雪夜

早乙女の[illegible]
妻恋呵ゴ[illegible]
[illegible]
雷木ハ祖父の[illegible]
[illegible]
十八 妹の[illegible]
一夜泊り[illegible]
[illegible]

地名ナ
ト心ノフ
カキ白ヨ
ロシ考
ヘシ

十

五璉

岩倉ハ寫の[illegible]
[illegible]
十五 笑ッ[illegible]
角カ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
二十 [illegible]
仲人[illegible]

金号ニシ
ルヘシ息ノ
勾ヲヒヒ
アルヘシ

十五

芳竹

春ごとに千世ゆるる陰人
物屋小名所の物と著して
紅千葉ある時知まる見頃
欲ふ武蔵浦色人もるるを
二十 節句千年ある佛淋しき
猟人のとこやらぬ玉箒
扱くやうに乾く沖の石
九五 浪の音千年ふく菖蒲

強号ニシ
ルウヒモ
ノナトヨ
ロシ

十五

菊童

月百小八指ゆるる浜ぶら
丈夫を花千光の立際
時百人とかけ業の縄式中
万石ふ〳〵長人を祝用
二十 蘇生して尽しの年蓬
教先乃物千家紙注
待意の沢乎ふつる雪嶋
九五 実色花ふ物の玉業九物千

ツヨキカ
タニテ
一句二拍
子アリ

園雪

十 [illegible]の雪[illegible]る小笹原
隅赤い[illegible]婆[illegible]の大口
[illegible]の中へ[illegible]
十五 [illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]
二十 山田乃秋へまハる雙師
[illegible]竹[illegible]三笠山

和ラカナ
リ水辺
ノ句作
ヨシ

雙竹因

十五 樓船[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
二十 [illegible]
[illegible]
十五 [illegible]

ツヨキ句
モヨシ実
情ノ句
作拍子
アルヘシ

独立

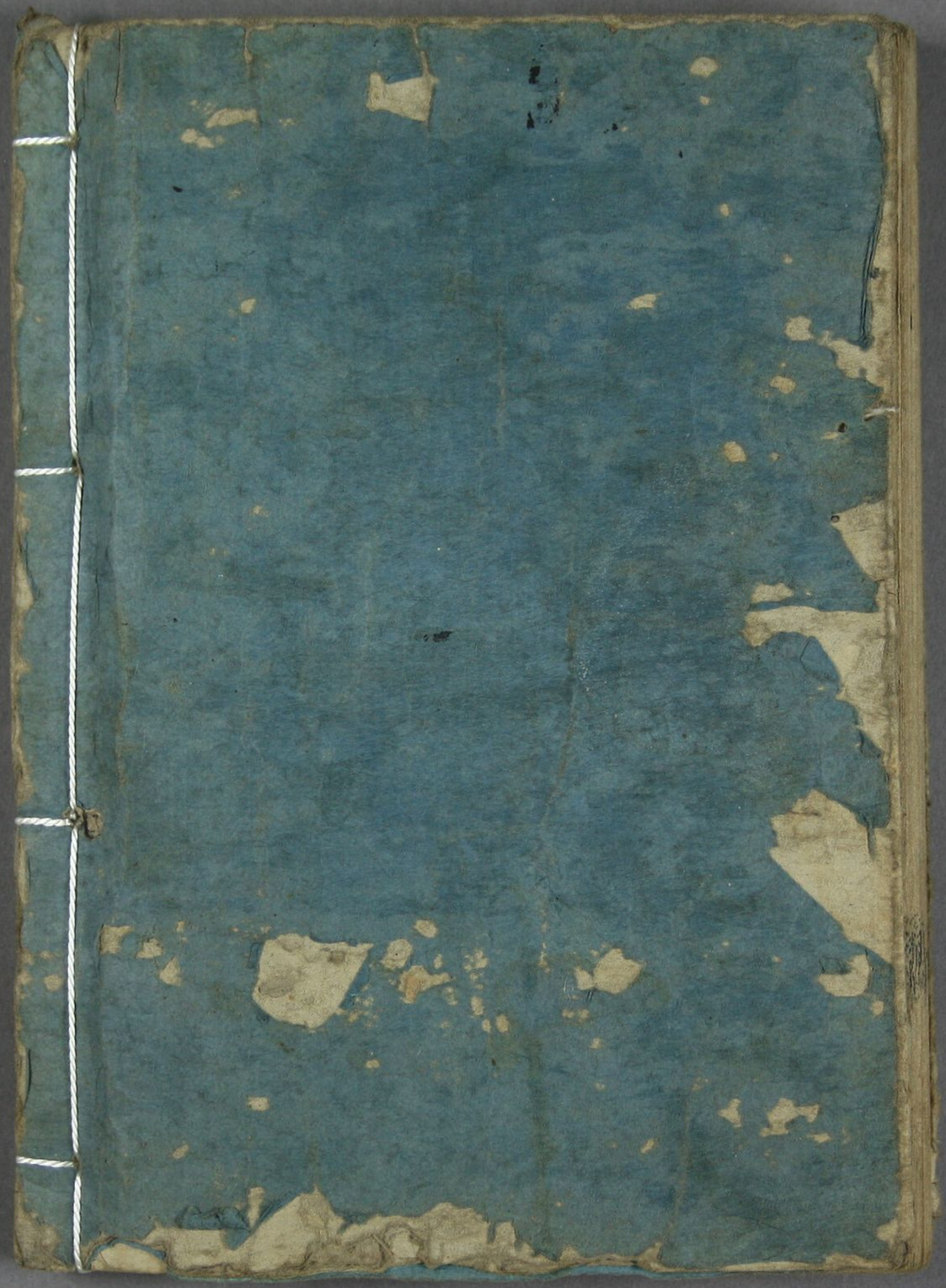
立志

十五 仲人を初め事に附ハ取ゑて
人間百万事後を悔る者
出まゝ〳〵智識無と云ゆる
道の間を根気も把て無ル
十八 衣を乞る日を人乃言ハ
二十 咨絶ふ蓋をして立一厂の変
墨法ハ又近さる俳の衣
廿五 判録を佛の中城従来して

右の部ハ宝暦大町俳作雷吳寸壱
あ甲さいまさるる長を付集めた
ゆ月さ編ハ漢ゆ書さ〳〵ゆ

俳諧童の的　江戸宗道十五点
初編二編三編出来 以上を去る
さんの弱の聲　江戸大俳の句を記
初編二編出来

環山点一万句　一冊十五点以上を去る
迫刻

書肆　ゆ石町四丁目天下茶屋
堀野屋仁兵衛

南都新聞
[illegible]
[illegible]